

「さあ、どうするの？ イレイナさん。勝負する？ それとも降りる？」

リリエールはイレイナの傍らかたわに重なった山を見つめていた。

チップの数は紙幣しへいに直すと、おおよそ一千万レインと云ったところ。

勝てばすべてが手に入るが、負ければすべてを奪われる。リリエールの圧倒的な財力を前に、イレイナは今までちまちまと貯めていた金を投じて戦わなければならない。勝てば勝つほど——続ければ続けるほど、負けたときのリスクは跳ね上がる。

……………。

もしかしてこの展開を見越してあえて倍々にかけてたの？

無謀むぼうを通り越してただの馬鹿ばかとか思ってたすみませんでした。やっぱり世の中金ですよね。へへへ。

「さあどうするの？ 早く決めて」リリエールが急かし。
「……むむむむむ。うううう……」イレイナが頭を抱える。
そして。

大金をかけた戦いが膠着こうちやく状態に陥おちいって、しばらくの間が流れたときだった。

「全員そこを動くな！」

カジノの扉が、轟音ごうおんと叫喚きょうかんによって開かれ、物々しい武装をした集団が入ってきた。

たった一瞬でしんと静まり返った店内の中、荒々しい足音と、先頭を歩く男の声だけが響く。

りょういきとし

「我々は領域都市保安局！ここに国外から侵入してきた魔女がいるとの情報を入手した！よってここを調査させてもらう。——貴様ら。くまなく探せよ」

連れ歩く保安局員たちに目配せを送る。

ぞろぞろとやって来た保安局の連中は、蜘蛛くもの子のように店内に散った。

兵士の一人がここにたどり着くのは時間の問題だろう。

「あら大変。外から来た魔女ですって。——いったい誰のことかしらね？ イレイナさん」

「……………」

「もしもあなたが本物の魔女だというのなら、大変ね。保安局の連中は人権なんてまるで考えないおぞましい連中よ。もしかしたら死ぬまで拷問ごうもんされるかも」

「え？ 僕、前に捕まったことあるけど、ごはんおご奢おごって貰もらった後に釈放しゃくほうされ——痛い！」言葉の途中でリリエールに足を踏ふまれた。なににするやめろ。

「ねえイレイナさん」リリエールはイレイナに身を寄せた。

「あなたの正体も境遇きょうぐうも知っているわ。どうしてあなたがここにいて、金を稼いでいるのかも。すべて知っている」「……ほう。あなたは全知全能のお偉いさんか何かなんですか？」

「違うわ。でもあなたのことは知っている」

「私はあなたに逢ったことはありませんが」
「今ここで虚勢きよせいを張るのはやめなさい。賢明けんめいとはいえないわ」

「……………」

「教えてあげる。今、あなたに残された道は二つよ」
リリエールは指を二つ立てる。

そして一つを折り、

「まず一つ目。ここで魔女としてあなたは捕まり、檻おりの中へとさようなら。あまりお勧めすすはしないわね。私も後味が悪くなるし」

「……………できれば避けたいですね」

「でしよっね」

そして彼女はもう一つを折る。「二つ目。今の勝負を放棄しなさい。そうすれば、私が全力で助けてあげる。そのうえで、あなたが国の外に出られるように協力してあげる」

「……三つ目とかはないんですか。私がこの勝負で勝って、国の外に出るとか——」

「この状況で勝負が続けられると思って？」

「……」

二人が一体何を話しているのかは、よく分からなかった。イレイナは物語に出ている魔女のコスプレをしているだけの女の子で、本物の魔女ではない——はずでしょう？

「一体どういふこと？」

僕が首を傾けると、リリエールは大げさに呆あきれてみせた。

「……あなた、あれだけ私たちの勝負を見続けていて、まったく気づかなかったの？ 私かいじゆが解呪したはずのイレイナ

が勝ち続けていることに、何の疑問も抱かなかったの？」

「え、うん。リリエール弱いな——って思ってた——痛い！」
足を踏まれたのは本日二度目。やめろつつつてんだろ。

保安局員たちの気配が近づく最中、リリエールは立ち上があった。
がった。

「時間がもつたいたいから、簡潔明瞭かんけつめいりように説明してあげる。

イレイナさんはね——コスプレなんてしてないの。外から

来た正真正銘しょうしんしょうめいの魔女なのよ。不幸にもこの国が魔法使いの入国を全面的に禁じていることを一切知らずに、入国し

てきてしまったのよ」

「えっと……？ 『めんどろいど』と？」
首を傾げる僕。

しかしリリエールがその場で僕の疑問に答えることはな
かった。

「降ります」

イレイナが、吹っ切れたように息をひとつ吐いて、勝負
を放棄していたから。

「賢明だわ」

リリエールは頷く。うなず

そして、

「じゃあ行きましょつか」

と、胸からペンを出し、僕ら三人を包むように、床に円を描いて見せた。